

2. 博多遺跡群221次・14次調査出土の動物遺体

新美倫子（名古屋大学博物館）

1、221次調査の動物遺体

博多遺跡群の221次調査では遺構埋土や包含層から動物遺体512点が出土した。これらはいずれも調査時に取り上げられたもので、貝類・魚類・爬虫類・鳥類・哺乳類が含まれていた。資料のほとんどは哺乳類であり、貝類・魚類・爬虫類・鳥類は計7点とわずかである。多くの資料が中世～近世のものであり、そのうち大部分の所属時期は13世紀～15世紀である。ただし、Ⅱ区の石組遺構と遺構131・164から出土した資料は11世紀後半～12世紀前半に、遺構141の包含層出土資料は12世紀後半に属するとのことである。これらの出土種名を表1に、出土内容を表2～11に、資料の計測値を表12に示した。なお、福岡市埋蔵文化財課の常松幹雄氏と井上繩子氏にはこの資料を分類する機会を与えていただいた。また、伊達市噴火湾文化研究所の西本豊弘先生には種同定に関して御教示をいただき、琵琶湖博物館の高橋啓一先生にはノロの現生標本を見せていただいた。ここに感謝いたします。

①貝類・魚類・爬虫類・鳥類

7点の資料すべてがⅡ区で出土している。貝類は遺構147（以後「遺構」の記載は省略）から種不明巻貝の小さな蓋が1点出土した。魚類は124で大きなタイ類の椎骨1点と、147で焼けた種不明椎骨が1点見られた。爬虫類は147でスッポン腹甲破片が2点見られ、鳥類は147でニワトリ？上腕骨遠位部1点と184で種不明の頭蓋骨破片1点が出土した。ニワトリ？上腕骨遠位部は関節部分が一部破損しており、大きさも現生キジ雄標本と同程度だったため、ニワトリかキジ類かを確定できなかった。

②哺乳類（表2～12）

505点が出土した。このうち、陸獣で種を同定できた資料は、ウマ116点・ウシ88点・シカ類56点・イノシシ類18点・イヌ12点・ヒト11点・カモシカ1点であり、海獣類はクジラ類など26点が出土している。これらの出土状況には地区によって偏りが見られ、Ⅰ区ではウマが主体となっており他の種の出土量はわずかである。Ⅱ区ではウシとシカ類の出土量が多く、ウマも比較的多く出土した。イノシシ類・イヌ・ヒト・海獣類も出土している。

a. ウマ（表2・12）

I区で71点、Ⅱ区で45点が出土した。I区SX31では成獣の左下顎骨と若獣の左右の下顎骨（同一個体）が出土した。成獣下顎骨（写真1-3）は第3後臼歯の最後部の咬頭まで摩滅が及ぶが、比較的若い。現生ヨナグニウマ標本と比較すると歯は少し大きく、骨体はひとまわり大きい。犬歯部分の骨体が残存しないために性別は不明である。下顎枝には穿孔が見られる。若獣下顎骨（写真1-2）では第3後臼歯が萌出途中であり、3～4歳頃の個体である。現生ヨナグニウマ標本と比較すると歯は少し大きい。犬歯部分の骨体は残っていないため性別は不明である。成獣下顎骨を①、若獣下顎骨を②として、表12に前臼歯・後臼歯の長さと幅を示した。SX31ではこれらとは別に同一個体に属する左右の下顎切歯6点が出土しており、これらの第1・第2切歯は萌出完了し、第3切歯は未出でおそらく萌出直前である。これらの切歯はその萌出状況から見て、上述の若獣下顎骨と同一個体かもしれない。他には左中手骨と下顎右犬歯が出土した。この下顎右犬歯には摩滅は見られず、上述の若獣下顎骨あるいは成獣下顎骨と同一個体の可能性もある。もし同一であればその下顎骨は雄である。

I区SX36では同一個体の椎骨・肋骨・寛骨・後肢が交連状態で出土したが、保存状態が悪いために

取り上げることのできなかった資料もある。もとは上半身の骨も存在した可能性が高いが、後に失われたと推測される。また、I区遺構外の上層では、2m×0.5mほどの範囲内で近接して上顎の左右の切歯部分、下顎の左右の切歯部分と左右の下顎骨の前臼歯・後臼歯部分が出土している。これらは同一個体のものかもしれないが、保存状態が悪くてよくわからなかつた。下顎骨の前臼歯・後臼歯の計測も不可能であった。II区で出土した資料の多くは上下顎の遊離歯である。

b. ウシ（表3）

I区で10点、II区で78点が出土した。出土資料を現生改良和種標本と比べると、この標本よりもひとまわり小さな物からひとまわり大きなものまで見られ、ウシの大きさには幅があった。II区131では43点と多くの資料が出土したが、この中には同一個体の上腕骨・橈骨・尺骨や大腿骨・脛骨など、四肢骨がある程度のまとまりを持ってつながったまま廃棄されたと思われる資料も見られた。II区184で出土した中手骨（写真2-5）は近位と遠位の骨端部を切り取られており、加工品の原材であろう。

なお、II区1-2面出土の左上腕骨は現生改良和種標本よりかなり大きく、その大きさは現生ホルスタインに近い。所属時期が新しいものかもしれない。

c. シカ類（表4）

I区で5点、II区で51点が出土した。出土した資料は現生ニホンジカ標本（愛知県産）と比べて同程度の大きさかそれよりやや小さい資料が多いが、II区021・石積遺構・147や1-2面ではこれらさらに小さく愛知県産現生標本の2/3程度の大きさ（長さは8割程度）の距骨も見られた。これら小型の資料は、形はニホンジカと同じであったが、その大きさがニホンジカの範囲に含まれるのか否かが問題となる。日本に生息するシカ科はニホンジカのみであるが、中国大陸には大きさの異なるさまざまな種が生息しており、ニホンジカより少し小型の種としてはノロがある。しかし、これらの資料を現生ノロ標本（琵琶湖博物館蔵）と比較すると、それよりはかなり大きかった。また、ニホンジカはサイズの変異が大きく、最小の個体と最大の個体では体重が4倍近く異なる（盛他2000）。骨の大きさも、例えば中手骨の長さを筆者所有の現生ニホンジカ標本で比較すると、北海道産では223.4mmであるが、愛知県産では198.5mm、大分県産では175.0mmと大きな差がある。これらの点から見て、上述の小型の資料はニホンジカの変異に含まれると考えてよいであろう。

147では25点がまとまって出土しているが、加工品作成の過程で切断されたと思われる痕が残る資料も複数見られた。5-6面出土の右前頭骨は頭蓋骨正中線あたりで切断され、角突起も切り取られてその断面がきれいに丸められている（写真2-1）。同じく5-6面出土の左中足骨近位端は骨幹部から割り取られており、加工の残片だと思われる。

なお、ニホンジカよりも明らかに大きいため、表4で「大型シカ」とした資料が2点出土している。1点はII区079出土の右頸静脈突起であり、もう1点はII区147出土の左踵骨（写真2-4）である。いずれも日本列島に生息するニホンジカの中で最大の現生北海道産標本よりもかなり大きく、踵骨の長さは124.3mmであった。これらはシフゾウやスイロクなどの中国大陸に生息する大型のシカと思われ、その骨などが加工品の原料として輸入されたのかもしれない。

d. イノシシ類（表5）

ここでイノシシ類とした資料は「ブタ」と「イノシシかブタかを確定できない資料」の両方を含み、18点すべてがII区から出土した。164出土の下顎骨は第3後臼歯の後半部が欠損しているため、その萌出が完了しているか否かが確認できず、萌出途中の若獣かもしれない。骨体は肥大して下顎角部分も厚く、ブタと思われる。

147出土の右脛骨 1 点を除いて、出土した四肢骨は現生野生ニホンイノシシ標本（岐阜県産）と比べてかなり大きく肥大したものが多く、ほとんどの資料は野生イノシシではなくブタと思われる。なお、147出土の脛骨のみは他資料と比べてかなり小さく、現生リュウキュウイノシシ（西表島産）と同程度の大きさであり、沖縄など南方の地域産の小型のブタである可能性もある。

e. イヌ（表6）

I 区で 1 点、II 区で 11 点が出土した。保存状態の良い頭蓋骨・下顎骨が出土せず、完存の四肢骨もないで、形質や体高についてはよくわからないが、現生柴犬標本よりもひとまわり大きな資料が多い。

f. ヒト（表7）

I 区で 1 点、II 区で 10 点が出土した。II 区 144 で出土した下顎骨（写真2-3）はほぼ完存で切歯と左犬歯・第1前臼歯は脱落しているが、第2後臼歯までのすべての歯が萌出完了している。第1後臼歯はある程度摩滅が進んで咬合面が平坦になりかけており、第2後臼歯ではわずかに摩滅が見られる。しかし、この段階で第3後臼歯の歯槽が開いていないので、第3後臼歯が萌出しない個体なのかもしれない。右第1後臼歯の歯槽骨には歯周病が見られる。

g. 海獣類（表10）

I 区で 1 点、II 区で 25 点が出土した。クジラ類とわかる資料はクジラ類と記載し、それ以外の資料は小さな破片なので鰐脚類の可能性も否定できないことから海獣類としたが、これらも大部分はクジラ類と思われる。I 区上層出土のクジラ類椎骨は体長 7 ~ 10m 程度の個体と思われ、一部分が削られている。海獣肋骨片にも、削ったり切ったりした加工痕の残る資料が見られた。II 区 124 出土のクジラ類若獣椎骨は、小型のゴンドウクジラ類程度の大きさである。

h. その他（表8・9・11）

他にはウシまたはウマの破片が 96 点、シカ類またはイノシシ類の破片が 24 点、陸棲哺乳類とのみ判別できる陸獣破片が 19 点、保存状態が悪く陸獣か海獣かも判別できない骨片が 37 点出土した。

表2～11の出土内容に含まれない資料としては、II 区 2 面でカモシカの下顎右第3後臼歯 1 点と、II 区 147 で種不明とした左下顎骨（写真2-2）が 1 点出土した。この下顎骨は第3後臼歯以外の歯や骨体の形状はシカに似ており、前臼歯 3 本・後臼歯 3 本が萌出完了し成獣である。大きさは愛知県産現生シカ標本よりひとまわり小さい。歯の長さは、第1後臼歯が 13.9mm、第2後臼歯が 17.4mm、第3後臼歯が 19.2mm である。ただし、シカと大きく異なるのは第3後臼歯の最後部の咬頭が非常に小さい点である。この第3後臼歯の形状から見て当資料はシカ属ではなく、ノロ・カモシカ・ヤギ・ヒツジでもない。

表1 出土動物種名

I. 貝類	IV. 鳥類
1 種不明	1 ニワトリ？
	5 クジラ類
	6 イヌ
II. 魚類	V. 哺乳類
1 タイ類	1 イノシシ類
	2 ニホンジカ
III. 爬虫類	3 シカ類
1 スッポン	4 ニホンカモシカ
	7 ウマ
	8 ブタ
	9 ウシ
	10 ヒト

表2 ウマ出土内容

発掘区	遺構	層位	時期	部位・点数	計
I 区	SX28		14世紀頃	歯破片 1	1
	SX31	下層 12世紀後半～14世紀頃		下顎骨左 (P234M123) 関節突起なし、穿孔あり①	
				下顎骨 左 (P234M12 ③) M3 萌出途中、関節突起なし 右 (× P4M12 ③) M3 萌出途中、関節突起あり②	
				下顎右 C、中手骨左中～下 1 部焼	
				下顎右 I ③未出、萌出直前	
				下顎左 I12 ③ I ③は未出、萌出直前 同一	
	SX32	—	14世紀頃	下顎右 I12	
	SX36	下層 13世紀頃		上顎左 M1	1
				上顎右 I2 寛骨破片 3、大腿骨左下破片 2、右下 1、脛骨右下 1 焼 中足骨右上～中 1 焼、中足骨？中 1 焼？、中破片 1、距骨左 1 焼 同一 右 1 焼、手足根骨 3 焼、四肢骨破片 3、椎骨？破片 1、肋骨片 17	37
	SX39	—	13世紀頃	大腿骨左中 1	1
SX46	—	13世紀頃	大腿骨右中 1、中足骨左？中 1	2	
	下層	13世紀頃	下顎右 M1 ? 破損	1	
			大腿骨左中 1	1	
	上層	中世後半	下顎骨左 (P234)		
			上顎左 M1、下顎左 M2 老	3	
	包含層	上層	中世後半	上顎骨 左 (I123) 右 (I123) 同一 下顎骨 左 (I12) 右 (I123) 同一 下顎骨右 (P234M123) 関節突起あり 下顎骨左保存悪いがおそらく P2～M3 あり、関節突起あり 軸椎 1	5
サブトレ南	—	中世後半	下顎左 M1 若	1	
I-5 区	包含層	上層	中世後半	下顎右 M1	1
I-2 区	包含層	中層	15世紀頃	下顎右 I3	1
I-3 区	包含層	中層	15世紀頃	上顎左 P3、寛骨右坐 1、脛骨左下 1	3
I-5 区	包含層	中層	15世紀頃	上顎左 M2	1
I-2 区	包含層	下層	中世後半	下顎左 P4 ?	1
I-3 区	検出面	—	不明	歯破片 1	1
II 区	021	下層	中世前半	上顎臼歯破片 2、下顎臼歯破片 1	3
	070	3-4面掘り方	近世	寛骨右腸 1 部焼	1
	106	—	不明	下顎左 P3orP4、右 P2	2
	124	上層	中世後半～近世	下顎右 I2	
			中世後半～近世	上顎臼歯破片 7、寛骨右坐 1	9
	石積遺構	前面	11世紀後半～12世紀前半	下顎左 M3	1
	141	包含層	12世紀後半	下顎左 P4 ? 破損	1
	147	5-6面 6面 6-7面 南落ち付近	中世前半～近世	上顎右 M1 ? 老、摩滅進み歯冠部なし	
			中世前半～近世	下顎左 M3、上腕骨右中 1	
			中世前半～近世	下顎左 m4、距骨右 1、手足根骨 1 部焼	8
			中世前半～近世	上顎臼歯破片 1	
	154	—	中世～近世	中節骨上 1	
	184	南側下層	中世前半	下顎臼歯破片 1	1
			中世前半	脛骨左中～下 1	2
	ベルト 1	上層砂質土	中世～近世	上顎左臼歯破片 1 部焼	1
	1-2面	1層	中世前半～近世	上顎左 P3、右 M3、上顎臼歯破片 8	10
	2面	—	中世前半～近世	中手足骨下 1 + 基節骨 1 + 中節骨 1 + 手足根骨 1 同一	4
	南壁トレンチ	石積背面側	中世前半～近世	上顎左 P4	1
	検出面	—	中世前半～近世	上顎右 M2 老	1
					計 116

註 I: 切歯、C: 犬歯、P: 前臼歯、M: 後臼歯、m: 乳臼歯、I・P・M・m に伴う数字は歯の順番を示す。

() は顎骨があることを示し、×は歯が脱落していることを示す。○のついた歯は未出または萌出途中であることを示す。

腸: 腸骨部分、坐: 坐骨部分、恥: 恥骨部分。焼: 焼けた資料。上: 近位部、中: 中間部、下: 遠位部、

上・中・下のないものは完存。ハズレなし: 成長途中であるため骨端が分離して、かつ残存していないことを示す。

ハズレあり: 成長途中であるため骨端が分離しているが、残存していることを示す。幼: 幼獣、若: 若獣、老: 老獣、

幼・若のないものは成獣。同一: 同一個体。下顎骨の No. は表 12 の計測値に対応する。

表3 ウシ出土内容

発掘区	遺構	層位	時期	部位・点数	計
I 区	SX31	下層	15世紀頃	尺骨右破片 1	2
		—	15世紀頃	肩甲骨左 1	
	SX39	—	13世紀頃	脛骨右中～下 1	1
	SX46	下層	13世紀頃	肩甲骨左 1、橈骨左上破片 1	2
	SK25	—	15世紀頃	下左 M3 破損	1
	SE26 掘り方	中世後半	踵骨左破片 1		1
	SE47 掘り方	中世後半	中足骨右上～中 1 一部焼		1
I-2 区	包含層	中層	中世後半	上顎左 M3、右 P3	2
II 区	013	下層(粗砂層)	中世～近世	下顎右 M3	1
	079	—	中世～近世	上顎右 M3	1
	124	上層	中世後半～近世	下顎左 M1・M2・M3 同一	3
	130	一段下層	中世前半	大腿骨右下破片 1 下ハズレなし若	2
		—	不明	上顎左 M3	
	131	—	11世紀後半	肩甲骨左破片 1、上腕骨左上 1、下 1 半欠一部焼、橈骨左下 1	43
			～ 12世紀前半	尺骨左上 1、上腕骨左下 1 + 橈骨左上 1 + 尺骨左破片 2 同一 中手骨左上 1 半欠、左右不明下 1、中手足骨下 1 半欠 大腿骨左上 1、下 1 + 脛骨左上 1 同一、下 1、下破片 1、右中破片 1 基節骨 4、上 1、下 1、中節骨上 1、中節骨上 1 半欠 末節骨 1、基節骨下 1 + 中節骨 1 + 未節骨 1 同一部焼 中節骨 1 + 未節骨 1 同一、椎骨 3、手足根骨 8	
	147	4-5 面	中世前半～近世	上顎右 m3、尺骨左 1	78
		5 面	中世前半～近世	中手骨左上～中破片 1、脛骨右中～下 1	
		5-6 面	中世前半～近世	上腕骨右中破片 1 一部焼、手足根骨 1	
		6 面	中世前半～近世	踵骨左 1 若一部焼	
		6-7 面	中世前半～近世	上顎左 M1	
		7 面	中世前半～近世	脛骨左中 1、右下 1 下ハズレなし若	
		7 面下	中世前半～近世	上顎左 M 破片 1	
		ベルト上層	中世前半～近世	上顎左 M2	
		南落ちぎわ下げ	中世前半～近世	歯破片 1	
	149	—	中世～近世	橈骨左中破片 1	1
	154	—	中世～近世	下顎右 M3	1
	175	—	中世～近世	踵骨右 1	1
	184	—	中世前半	下顎骨 [左 (P123M123) 連合部あり、筋突起・関節突起なし 右 (P123M123) 連合部あり、筋突起・関節突起なし同一 脛骨右上破片 1、中手骨右中 1 上下切断]	3
	1-2 面	1 層	中世前半～近世	上顎右 M3、下顎右 P3、下顎骨破片 5 上腕骨左下破片 1、寛骨右腸 1	9
	計				
					88

註 表2 参照。

表4 シカ類出土内容

発掘区	遺構	層位	時期	部位・点数	計
I 区	SX39	一	13世紀頃	上腕骨左中～下1	1
	SX46	下層	13世紀頃	上腕骨右中1、大腿骨右上1	2
	SE38 井筒	一	15世紀頃	大腿骨左上1 上ハズレなし若焼	1
I-1 区	包含層	中層	中世後半	距骨右1	1
II 区	147	6-7面	中世前半～近世	上腕骨左下1	1
	021	下層	中世前半	距骨左1	1
	064	一	中世～近世	橈骨右中1、脛骨左下1 下ハズレなし若、踵骨右1若	3
	079	一	中世～近世	大型シカ頸静脈突起右1	1
	106	一	中世～近世	中手骨中破片1	1
	124	上層	中世後半～近世	距骨右1 半欠	
		ベルト2	中世後半～近世	椎骨破片1 燃	3
	130	一	中世後半～近世	下顎右M1一部焼	
		一段下げる	中世前半	大腿骨右上破片1 燃	1
		石積遺構	一	11世紀後半～12世紀前半 大腿骨左上1、距骨右1、角破片1	3
II 区	147	4-5面	中世前半～近世	椎骨1半欠	
		5-6面	中世前半～近世	前頭骨右1、環椎1、上腕骨右中～下1 下ハズレなし若 橈骨左中～下1 下ハズレなし若焼、中手骨中1 中足骨左上1、距骨左1、踵骨右1、1一部焼 角破片1	25
		6面	中世前半～近世	下顎骨右 (P234M12 ③) M3 萌出直前若 大腿骨右中1若、脛骨左上1若上ハズレなし一部焼 大型シカ踵骨左1	51
		6-7面	中世前半～近世	脛骨左中1、踵骨右1 燃、中手足骨中破片1 燃、中節骨1、角破片？1	
		7面	中世前半～近世	右前頭骨一部+角突起+角、中手骨中～下1、角破片1	
	164	一	中世前半～近世	上顎臼歯破片1、踵骨右1若	
		上部	11世紀後半～12世紀前半	中手骨中1、脛骨右下1 半欠	2
		南側下層	中世前半	下顎左M2	
II 区	184	掘り下げる	中世前半	基節骨下1	3
		一	中世前半	中手骨左1	
	ベルト1	1-2面	中世～近世	上腕骨左下1 燃	1
	1-2面	1層	中世前半～近世	肩甲骨右破片1 一部焼	2
		2層	中世前半～近世	距骨左1	
	2-3面	トレンチB	中世前半～近世	脛骨左中～下1 一部焼、右下1 一部焼	2
	5面	一	中世前半～近世	中足骨左中～下1 下は半欠	1
	5-6面	一	中世前半～近世	基節骨1	1
計					56

註 表2参照。

表5 イノシシ類出土内容

発掘区	遺構	層位	時期	部位・点数	計
II 区	106	一	中世～近世	上腕骨左下破片1、椎骨1	2
	124	2層	中世後半～近世	上顎骨左 (P34M1)	1
	石積遺構	背面粗砂	11世紀後半～12世紀前半	肩甲骨右1大	1
	141	包含層	12世紀後半	尺骨右1	2
		一		上顎右M3 未出破片1	
	144	一	中世	肩甲骨右破片1	1
	147	5-6面	中世前半～近世	肩甲骨右1一部焼、脛骨右中1一部焼	4
		6-7面	中世前半～近世	上腕骨左中1一部焼、右中破片1一部焼	
	164	上部	11世紀後半～12世紀前半	上顎右I1	2
		白磁溜	11世紀後半～12世紀前半	下顎骨左 (P34M123) ♀ M3 半欠若？一部焼	
	184	一	中世前半	頭蓋骨破片1、下右I2一部焼 肩甲骨左1大、上腕骨左中～下1大	4
	6面	一	中世～近世	肩甲骨左1半欠	1
計					18

註 表2参照。大：大型の資料。

表6 イヌ出土内容

発掘区	遺構	層位	時期	部位・点数	計
I 区	SE38 挖り方		15世紀頃	大腿骨左中～下 1	1 1
	021	下層	中世前半	上顎骨左 (×××) P3～M1 部分	1
	石積遺構	—	11世紀後半～12世紀前半	尺骨左 1	1
	144	—	中世	中手足骨上 1	1
		6面	中世前半～近世	上顎骨右 (×××) I1～3 部分、椎骨 1	
II 区		6面下	中世前半～近世	上腕骨左中 1	
	147	7面	中世前半～近世	脛骨右中～下 1	7
		トレンチ暗灰褐色土	中世前半～近世	上腕骨左下 1、中手足骨 1	
		—	中世前半～近世	上腕骨左上～中 1	
	164	上部	11世紀後半～12世紀前半	仙骨 1	1
				計	12

註 表2参照。

表7 ヒト出土内容

発掘区	遺構	層位	時期	部位・点数	計
I 区	SX33	—	14世紀頃	脛骨右中 1	1 1
	124	2層	中世後半～近世	寛骨腸破片 1	1
	石積遺構	—	11世紀後半～12世紀前半	橈骨左？中 1、四肢骨破片 1	2
II 区	144	—	中世	下顎骨 左 (×××× P2M12) 右 (×× CP12M12)	1 10
	ベルト 1	1面	中世～近世	脛骨左中 1	1
	2-3面	トレンチ A	中世前半～近世	四肢骨破片 5	5
				計	11

註 表2参照。

表8 ウマ or ウシ出土内容

発掘区	遺構	層位	時期	部位・点数	計
I 区	SX31	—	15世紀頃	肋骨片 2	2
	SX36	—	13世紀頃	四肢骨？破片 1、破片 3	4
	SX39	—	13世紀頃	椎骨破片 1	1
	SX46	下層	13世紀頃	破片 2	2
I-4区	包含層	中層	中世後半	四肢骨破片 1	1
	114	—	中世	四肢骨破片 1	1
		2層	中世後半～近世	破片 1	
	124	落ちぎわ礫群	中世後半～近世	破片 1	3
		—	中世後半～近世	破片 1	
	130	一段下げ	中世前半	破片 1	1
	131	—	11世紀後半～12世紀前半	寛骨破片 1、四肢骨破片 2、椎骨破片 13、肋骨片 14、破片 25	55
	141	—	中世	破片 1	1
II 区	147	5-6面	中世前半～近世	破片 1	
		6-7面	中世前半～近世	四肢骨破片 3、2焼、肋骨片 1、破片 1	9
		—	中世前半～近世	破片 1	
	154	—	中世～近世	破片 7	7
	182	炭化層上面まで	中世前半	肋骨片 2	2
	183	—	中世前半	四肢骨破片 3	3
	184	南側下層	中世前半	破片 1	1
	ベルト 1	1-2面	中世～近世	破片 1	1
	1-2面	1層	中世～近世	破片 2	2
				計	96

註 表2参照。

表12 ウマ前臼歯・後臼歯の計測値

	下顎骨①		下顎骨②	
	長さ	幅	長さ	幅
第2前臼歯	30.2	13.2	28.6	12.2
第3前臼歯	25.6	14.5	26.8	13.5
第4前臼歯	24.6	14.5	25.1	11.5
第1後臼歯	22.7	13.3	24.6	12.2
第2後臼歯	22.8	12.7	26.2	10.6
第3後臼歯	28.1	11.8	—	—

註 表2参照。計測値の単位はmm。

VII章

表9 シカ類 or イノシシ類出土内容

発掘区	遺構	層位	時期	部位・点数	計
	106	—	中世～近世	椎骨 1 半欠	1
	石積遺構	—	11世紀後半～12世紀前半	四肢骨破片 1、肋骨片 1	2
II 区	147	4-5 面	中世前半～近世	四肢骨破片 2	15
		5-6 面	中世前半～近世	脛骨右中破片 1、四肢骨破片 1、肋骨片 1	
		6-7 面	中世前半～近世	四肢骨破片 6、1一部焼、肋骨片 1、椎骨破片 1	
		ベルト上層	中世前半～近世	四肢骨破片 1	
	184	南側下層	中世前半	肋骨片 1	1
	1-2 面	1 層	中世～近世	四肢骨破片 5	5
				計	24

註 表2参照。

表10 海獣類出土内容

発掘区	遺構	層位	時期	部位・点数	計
I-1 区	包含層	上層	14世紀頃	クジラ類椎骨 1	1 1
II 区	124	上層	中世後半～近世	海獣肋骨片 3	7
		2 層	中世後半～近世	海獣破片 1	
		3 層 (暗褐色土)	中世後半～近世	クジラ類椎骨破片 1	
		—	中世後半～近世	クジラ類椎骨 1 若、海獣破片 1	
	147	2 層	11世紀後半～12世紀前半	海獣破片 1	3 25
		5 面	中世前半～近世	クジラ類破片 1	
		5-6 面	中世前半～近世	クジラ類破片 1 一部焼	
	184	南側下層	中世前半	クジラ類破片 1 一部焼	1
	1-2 面	1 層	中世～近世	クジラ or イルカ頭蓋骨？破片 1 海獣肋骨片 6、破片 2	9
	南壁石積背面	レンチ上層	中世	海獣肋骨片 1	1
	不明	—	不明	クジラ類破片 3	3
				計	26

註 表2参照。

表11 その他出土内容

発掘区	遺構	層位	時期	部位・点数	計
I 区	SX31	—	15世紀頃	骨片 1	1
	SX36	—	13世紀頃	陸獣破片 1、骨片 10	11
	SX46	下層	13世紀頃	骨片 1	1
I-3 区	杭側	—	中世後半	陸獣破片 3	3
II 区	059	上層	中世～近世	骨片 1	1
	071	—	中世～近世	骨片 1	1
	124	2 層	中世後半～近世	陸獣破片 1	5
		—	中世後半～近世	陸獣四肢骨破片 2、骨片 1、焼骨片 1	
	131	—	11世紀後半～12世紀前半	骨片 3	3
	石積遺構	裏込み	11世紀後半～12世紀前半	陸獣破片 3	4
		—	11世紀後半～12世紀前半	骨片 1	
	147	5-6 面	中世前半～近世	陸獣四肢骨破片 1	6 40
		6-7 面	中世前半～近世	陸獣破片 1	
		8 面検出	中世前半～近世	焼骨片 1	
		トレ (暗褐色土上層の層砂)	中世前半～近世	陸獣破片 1	
		ベルト下層	中世前半～近世	陸獣四肢骨破片 1	
		—	中世前半～近世	骨片 1	
	184	掘り下げ	中世前半	陸獣破片 3	3
	1-2 面	1 層	中世～近世	骨片 15	15
	2-3 面	レンチ A	中世～近世	陸獣破片 2	2
				計	56



1



2



3

写真1 ウシ・ウマ（約1/2）

1. ウシ（成獣）下顎骨左 2. ウマ（若獣）下顎骨②左 3. ウマ（成獣）下顎骨①左
①②の数字は出土内容表を参照

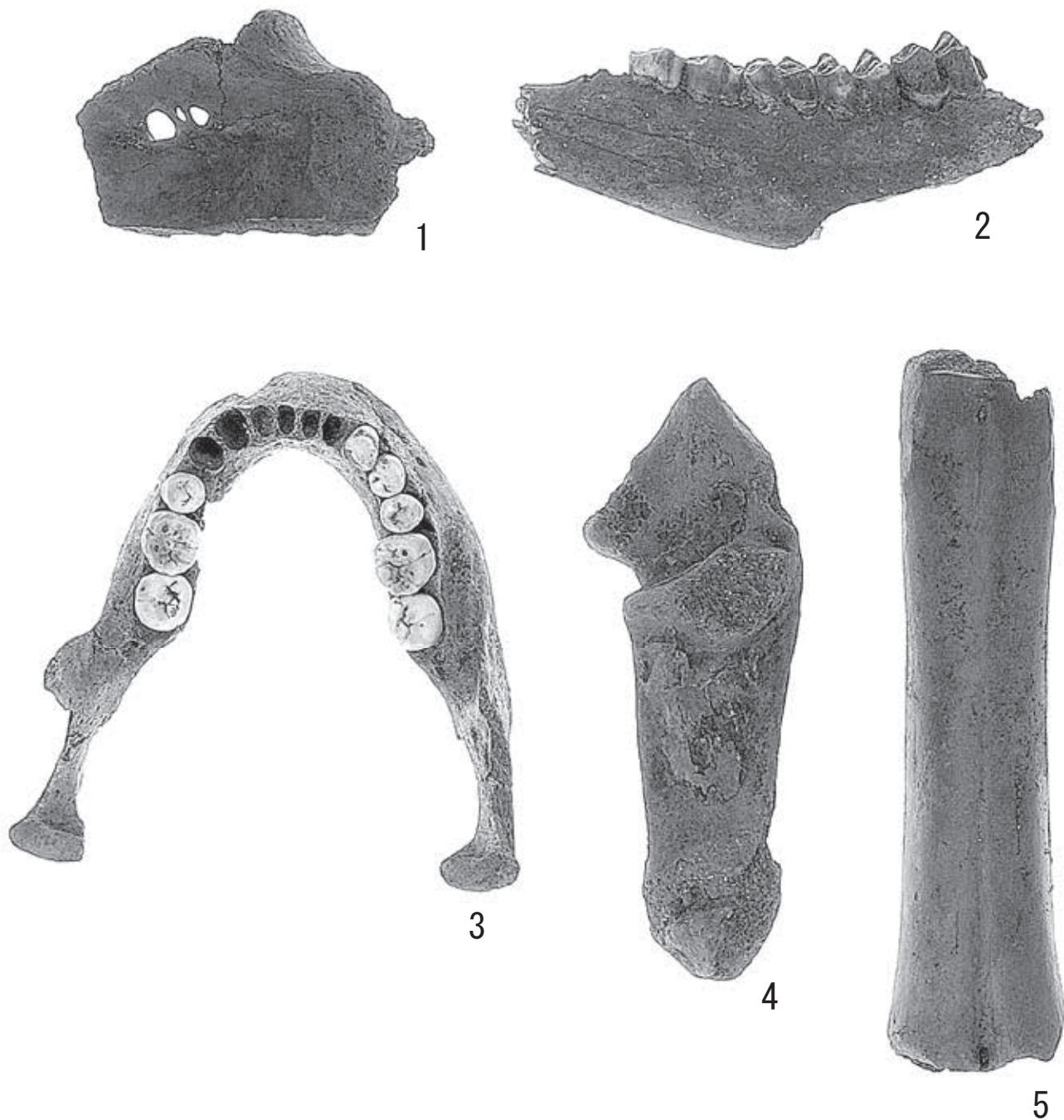


写真2 シカ類・ヒト・ウシ・その他（約2/3）

1. ニホンジカ前頭骨右
2. 種不明下顎骨左
3. ヒト下顎骨
4. 大型シカ踵骨左
5. ウシ中手骨右

2、14次調査の動物遺体

博多遺跡群の14次調査では遺構埋土や包含層から動物遺体1018点が出土した。これらはすべて調査時に取り上げられたものであり、その内訳は魚類3点、爬虫類123点、鳥類20点、哺乳類872点であった。これら資料の所属時期は、包含層については上層が12～13世紀、中層は11世紀後半～12世紀前半、下層は11世紀前半以前である。遺構については溝・土坑の中層が11世紀末～12世紀前半、上層が12世紀後半以降で、井戸が12～13世紀以降であるが、新しい資料であっても中世の範囲には収まるとのことである。これらの出土種名を表1に、出土内容を表2～13に、資料の計測値を表14～18に示した。なお、福岡市埋蔵文化財課の常松幹雄氏と池崎譲二氏にはこの資料を分類する機会を与えていただいた。また、伊達市噴火湾文化研究所の西本豊弘先生には種同定に関して御教示をいただき、琵琶湖博物館の高橋啓一先生にはノロの現生標本を見せていただいた。ここに感謝いたします。

①魚類・爬虫類（表2）

魚類はサワラ類？の椎骨2点と種不明の椎骨1点が出土した。サワラ類？は体長1m前後と思われる個体であり、種不明とした資料も大型の個体である。サワラ類？のうち1点と種不明椎骨には切断痕が見られた。爬虫類ではウミガメ類の甲羅破片が計123点出土した。背甲の破片と判別できた資料もあるが、多くの破片は細かく割れていたため、背甲か腹甲かはわからなかった。

②鳥類（表3・14）

出土した20点のうち種を同定できた資料は13点であり、これらはすべてニワトリであった。上腕骨が1点、尺骨2点、大腿骨1点、脛骨5点、中足骨4点が見られたが、このうち少なくとも7点が包含層の上層下部から中層上部で出土しており、12世紀頃の資料が多いと思われる。完存で長さを計測できる部位については表3中でNo.をつけ、表14に計測値を示した。上腕骨①（写真1-1）は長さ64.4mmで、現生キジ雄標本よりも短い。尺骨は2点のうちの1点が完形（写真1-2）で長さ72.0mmであり、これは現生オナガドリ雄標本とほぼ同じであった。大腿骨（写真1-7）は遠位端が破損しており計測できなかつたが、上述のオナガドリ雄より少し長いと思われる。脛骨では3点を計測することができたが、3点とも近位端が若干破損しているので長さは推定値である。①（写真1-8）の108.6mmは上述のキジ雄より若干短いが、②（写真1-9）の122.0mmは現生白色レグホン雌標本と同程度であり、③（写真1-10）の129.0mmは同じく白色レグホン雌より少し長い。中足骨4点はすべて雄でケヅメがあり、①（写真1-3）の81.6mmは上述のオナガドリ雄より少し長く、③（写真1-5）の84.1mmは上述の白色レグホン雌と同程度である。

③哺乳類（表4～13）

出土資料872点のうち、陸獣で種を同定できたのは、シカ類221点、イヌ135点、イノシシ類108点、ウマ72点、ウシ61点、ヒト23点、クマ1点、ウサギ1点の計622点である。海獣類ではクジラ類・イルカ類など5点が出土した。

a. シカ類（表4）

哺乳類の中で最も多い221点が出土した。出土した資料は現生ニホンジカ標本（愛知県産）と比べて同程度の大きさのものもあったが、それより少し小さな資料もあり、さらに現生標本よりひとまわり小さな資料まで、大きさの変異が見られた。この変異は雌雄差と個体差の両方を含むのであろう。これらはいずれもニホンジカと思われるが、その範囲から明らかに外れる小型の資料も2点見られた。1点は表4で小型シカと記載したG区中層上部出土の左脛骨中間部～遠位部（写真2-12）で、もう1点はG区中層中部出土の右中足骨近位部（写真2-14）である。この2点は関節部・骨幹部の幅が上述のニホンジカ標本よりかなり小さく、現生ノロ標本（琵琶湖博物館蔵）とほぼ同じであるので、ニホ

ンジカより小型の種と思われる。これら以外に、G区中層中部出土の小型シカ？とした右距骨（写真2-15）は長さ31.6mmで、大分県産ニホンジカ現生標本の距骨長さは35.8mm、現生ノロ標本は29.5mmであることから、ノロ標本よりはわずかに大きいが、これもニホンジカより小型の種である可能性が高い。また、G区中層下部出土の小型シカ？とした左上腕骨中間部は、骨幹部中央あたりで切断され、遠位端はイヌ等にかじられて消失しており、骨幹部だけなのではつきりしたことはわからないものの、成獣であるとすれば大きさ・幅がノロと同一であり、ニホンジカより小型の種ということになる。若くてまだ小さいニホンジカのものかもしれないが、骨体はかなりしっかりしており、成獣のものであってもおかしくない。一方、221次調査では出土したニホンジカよりも明らかに大きく「大型シカ」としたタイプは出土しなかった。

ニホンジカの下顎骨から見た最小個体数は、幼獣1個体、若獣1個体、成獣3個体の計5個体であるが、四肢骨で見ると最も多い脛骨遠位端から、若獣3個体、成獣11個体の計14個体であった。解体痕の見られる資料が多く、特に上腕骨に多く残っていた。骨を加工しようとした跡の残る資料もあり、溝2出土の左脛骨遠位端では骨幹部から関節部分を切り取った跡が見られ、遠位端が骨製品作成過程での不要部分であったのかもしれない。B区中層出土の脛骨左中間部～遠位端も関節部分を切り取ろうとした痕が見られ、同様の加工であろう。B区上層出土頭蓋骨では角突起が角座の下でたたき切られていた。なお、縄文時代の遺跡ではシカ四肢骨は斜めに割れた状態で出土するのが一般的であるが、中世の当遺跡では四肢骨は長軸と直行する横方向に切断されているケースが多かった。

b. イヌ（表5・15・16）

135点すべての資料が散乱した状態で出土し、解体痕の残る資料も複数見られた。発掘時に埋葬状態で出土した個体は見られなかったとのことであるが、溝3では同一個体に属すると思われる若獣の上下顎骨や四肢骨の一部が出土しており、もともとはほぼ1個体分の各部位が存在したのかもしれない。出土した成獣の頭蓋骨と下顎骨には表5中でNo.をつけ、これらの頭蓋骨の計測値を表15に、下顎骨の計測値を表16に示した。計測点は斎藤（1963）に従った。出土最小個体数は、下顎骨で見ると幼獣1個体、若獣2個体、成獣10個体の計13個体となった。

欠損のためにすべての頭蓋骨で最大頭蓋長は計測できなかった。そのため、表15では推定体高を示していない。完存の資料はないが、比較的欠損部分が少ない頭蓋骨①（写真1-11）では、現生柴犬標本の頭蓋骨と比較すると、全体形は少し長いがやや細い。この資料のストップはややはつきりしており、頬骨弓もやや張り出しが、その張り出しは柴犬よりは弱い。頭蓋骨③は現生柴犬よりも全体がやや小さいと思われ、頭蓋骨⑤はひとまわり大きいと思われる。頭蓋骨④ではストップははつきりしており、後頭部が斜めに切断されていた。

また、表16では10点の下顎骨の計測値と、下顎骨全長から復元した9点の推定体高を示した。体高の復元は、山内（1958）による。これら10点の下顎骨は形態から見て互いに別個体である。特に下顎骨③と下顎骨⑩は計測値が近似し、推定体高も近接しているが、第1後臼歯や第2後臼歯などの形態が少し異なり、やはり別個体と思われる。下顎骨から復元した推定体高には、最小の37cmから最大の48.3cmまでと差があった。37cmは現生柴犬程度の大きさであるが、それ以外はすべて40cmを超えていた。下顎骨の形態については、下顎底が下顎骨⑨（写真1-13）はかなり平らであったが、他の資料はやや丸く、骨体の高さは平行に近い資料の方が多かった。歯列の湾曲はいずれも現生柴犬より若干大きい。

c. イノシシ類（表6）

ここでイノシシ類とした資料108点には、「ブタ」と「イノシシかブタかを確定できない資料」の両

方が含まれている。出土した四肢骨の大部分は、現生野生ニホンイノシシ標本（岐阜県産）と比べて長さも幅もかなり大きい。また上述の現生標本と関節面の幅は同程度であるものの、明らかに太く肥大している資料も見られた。下顎骨も骨体が厚く肥大したものが多い。下顎連合部下面が残存し観察可能な資料は、B区中層出土の左右下顎骨とC区上層出土の下顎連合部破片の2点であるが、いずれも連合部下面是凹んでいた。また、B区中層出土左下顎骨（写真2-2）では、下顎連合部下面は大部分が欠損しているのでその状況はよくわからないものの、左右の下顎骨体のなす角度は野生イノシシよりも大きい。これらの資料には明らかに家畜化現象が認められることから、いずれも野生イノシシではなくブタと思われる。ただし、E区中層で出土した肩甲骨は上述の現生ニホンイノシシ標本と同程度の大きさで骨体もひきしまっており、ブタかもしれないがイノシシであってもおかしくない。また、同じE区中層で出土した上腕骨（写真2-3）は現生リュウキュウイノシシ標本（西表島産）と同程度の大きさであり、沖縄産などの小型のブタかもしれない。解体痕の残る資料も多く見られ、その他で出土した橈骨（写真2-5）は病変で骨幹部が幅広に変形していた。

最小個体数は下顎骨で見ると、幼獣1個体、若獣3個体（雄1・雌2）で成獣は出土していないが、上顎骨で見るとB区中層で雌成獣1個体が出土している。この右上顎骨（写真2-1）は顎だけでなく右の側頭骨・前頭骨・鼻骨の一部が残存しており、頭蓋骨は正中線で割られている。前頭骨から鼻骨にかけての部分は凹んでおらず、現代のブタほどは頭蓋骨が短縮化していない。けれども、歯は上述の現生ニホンイノシシ標本よりもひとまわり大きく、第2・第3後臼歯間の歯槽骨には歯周病が見られ、ブタであると思われる。第3・第4前臼歯と第1後臼歯は摩滅が著しく進んで歯冠部が残存せず、第2後臼歯も摩滅のために歯冠部の半分以上がなくなっている。最後に萌出する第3後臼歯も一部で歯頸線下まで摩滅が及んでおり、これらの摩滅状況からはかなり高齢の個体であると思われる。種ブタとして飼育されていたのかもしれない。

d. ウマ（表7・17・18）

14次調査出土動物遺体のうちで、体積では最も多くを占めたのがウマであるが、出土点数は72点と意外に少なかった。骨端の状態などから若獣と判断できる資料は、E区中層で出土した脛骨と中足骨の2点のみで、ほとんどの資料は成獣と思われる。ただし、溝1ではウマ？の胎児で同一個体と思われる資料が出土しており、中手骨・寛骨・大腿骨・脛骨・中足骨？が見られた。骨端部がない状態で、大腿骨の長さは41.0mmで、脛骨の長さは43.2mmであった。寛骨の腸骨と坐骨はまだ癒合しておらず、分離していた。なお、E区下層で出土した寛骨には解体痕が見られた。

下顎骨と完存の四肢骨には表7でNo.をつけ、下顎骨については歯の計測値を表17に、四肢骨については長さとそこから復元した体高を表18に示した。体高の復元は林田他（1957）による。なお、脛骨のうち①左脛骨と②右脛骨は同じA区下層から出土し、表17でもデータが一致しており、同一個体かもしれない。また、他にも表17には異なる部位同士でも同一個体の組み合わせが含まれている可能性がある。表17で復元された体高を見ると、最小が115.8cmで最大が142.2cmであり、110～120cm台のものが多い。筆者所蔵の現生ヨナグニウマ雌の体高が約110cmであり、現代の木曽馬の体高が約135cm程度とされているので、上腕骨②の142.2cm以外は日本在来馬の範囲に収まっているが、出土したウマの大きさにはかなりバラエティがあったと言える。

e. ウシ（表8）

ウシもウマと同様に体積が大きいわりに出土点数は61点と少なかった。出土資料は現生改良和種標本と比べると少し小さいものが多いが、同程度のものやひとまわり大きなものも見られた。解体痕の見られる四肢骨も複数見られた。また、角芯が土層確認トレーナーとB区中層とその他でそれぞれ1点

ずつの計3点出土したが、いずれもナタ状の刃物で何度もたたいて、根本から切り取られていた。南側トレンチで出土した頭蓋骨も、角芯は切り取られており、角が加工品の材料とされたのであろう。

C区中層で出土した下顎骨は現生改良和種標本より歯も骨体もかなり小さく、第1後臼歯の長さは20.5mm、第2後臼歯の長さは22.6mmだった。また、溝3から出土した下顎骨は、第4前臼歯の後半から第1後臼歯にかけての摩滅が他の歯種に比べてひどく進んでいた。

f. ヒト（表9）

頭蓋骨の一部や四肢骨とそれらの破片23点が散乱状態で出土した。四肢骨では骨端部がイヌなどに激しくかじられて消失しているものが目立ち、遺体が動物の餌になっていた状況がうかがわれる。B区中層で出土した後頭骨・右側頭骨は乳様突起が大きく、男性の可能性が大きい。また、溝3出土の大腿骨は現代日本人男性標本よりも長さ・幅共にひとまわり大きかった。

g. その他（表10～13）

その他の種が判明した陸獣には、クマの上腕骨中間部1点とウサギの上腕骨1点がある。表13で種不明陸獣とした下顎第3後臼歯は、形状はシカに近いものの第3後臼歯の最後部の咬頭が非常に小さい点が大きく異なり、先に述べた221次調査出土の種不明下顎骨と同じ種と思われる。この資料はシカ属ではなく、ノロ・カモシカ・ヤギ・ヒツジでもない。また、中小陸獣とした椎骨は、形状はキツネに近いが少し異なる資料で、大きさはホンドギツネよりもやや大型の現生キタキツネ標本と同程度である。海獣類では、イルカ類の後頭骨破片1点とクジラ類破片3点、海獣破片1点が見られた。

上述の資料以外には、表10～12に示したように、ウマまたはウシの椎骨とその破片・四肢骨破片・肋骨片などが67点、シカ類またはイノシシ類の椎骨とその破片・四肢骨破片・肋骨片などが130点、陸棲哺乳類としか判別できない陸獣破片が43点と、保存状態が悪く小片のため陸獣か海獣かも判別できない破片が3点出土している。

<引用文献>

斎藤弘吉1963『犬科動物骨格計測法』

盛和林・大泰司紀之・陸厚基2000『中国の野生哺乳動物』中国林業出版社

林田重幸・山内忠平1957「馬における骨長より体高の推定法」鹿児島大学農学部学術報告6、146-156頁

山内忠平1958「犬における骨長より体高の推定法」鹿児島大学農学部学術報告7、125-131頁

表1 出土動物種名

I. 魚類	IV. 哺乳類
1 サワラ類？	1 ノウサギ 8 イヌ
	2 ツキノワグマ 9 ウマ
II. 爬虫類	3 イノシシ類 10 ブタ
1 ウミガメ類	4 ニホンジカ 11 ウシ
	5 シカ類 12 ヒト
III. 鳥類	6 クジラ類
1 ニワトリ	7 イルカ類

表 2 魚類・爬虫類出土内容

発掘区	遺構・層位		種	部位・点数	計
A	溝 2	中層	サワラ類?	椎骨 1	3
C	包含層	上層下部	サワラ類?	椎骨 1	
M	包含層	上層下部	不明大型魚類	椎骨 1	
A	溝 2	中層	ウミガメ類	背甲片 1	123
G	溝 3	一括	ウミガメ類	背甲片 3	
C	土層確認トレンチ		ウミガメ類	甲羅片 3	
	包含層	上層	ウミガメ類	背甲片 22、甲羅片 94	

表 3 鳥類出土内容

発掘区	遺構・層位		種	部位・点数	計
G	溝 3	一括	種不明	四肢骨中 1	1
ACG	土層確認トレンチ		ニワトリ 種不明	脛骨右 1 ①、中足骨左 1 ♂③、右上～中 1 ♂ 四肢骨破片 1	4
L	北側トレンチ		ニワトリ	脛骨左 1 ③	1
A	包含層	中層上部	ニワトリ	大腿骨左 1	1
B	包含層	上層下部	ニワトリ 種不明	中足骨右 1 ♂① 四肢骨中 1	2
		中層上部	ニワトリ 種不明	中足骨右 1 ♂② 四肢骨中 1	2
		中層中部泥炭層	種不明	四肢骨中 1	1
		下層	ニワトリ	尺骨左 1 ①	1
C	包含層	上層下部	ニワトリ 種不明	尺骨左上 1、脛骨右 1 ② 四肢骨中 1	3
E	包含層	中層上部泥炭層	ニワトリ	上腕骨右 1 ①	1
H	包含層	中層上部	ニワトリ 種不明	脛骨左下 1 四肢骨中 1	2
その他			ニワトリ	脛骨左下 1	1
					計 20

註 上：近位部、中：中間部、下：遠位部、上・中・下のないものは完存。
計測可能な四肢骨には No. をつけ、対応する計測値を表 14 に示した。

表4 シカ類出土内容

発掘区	遺構・層位	部位・点数	計
B	溝1	一括 橋骨左上2	2
A	溝2	中層 橋骨左下1若下ハズレなし、中破片1、大腿骨左中1 脛骨左下1、右下1、中足骨右1、落角座+角一部右	7
BCG	溝3	一括 前頭骨一部+頭頂骨一部+側頭骨一部(頬骨突起あり)左♀、下顎筋突起右1 上腕骨左中～下1、右上～中1、右1一部焼、橋骨左上～中1、右1、尺骨左1 中手骨左1、左右不明中1、寛骨左坐1、大腿骨左下破片1若ハズレ焼、右上1 脛骨右中破片2、踵骨左1、基節骨3、中節骨1、末節骨2	22
G	井戸3	踵骨左1	1
	井戸3 挖り方	中手骨右中～下1若下ハズレなし	1
B	井戸6	上腕骨右下1半欠焼、脛骨右中～下1若下ハズレなし	2
	井戸6 挖り方	橋骨右中～下1	1
D	土坑2	基節骨1	1
	土坑3	脛骨左下1	1
ABCG	土層確認トレンチ	下顎骨左(×P34)成か、下顎関節突起+筋突起右1、肩甲骨右1、上腕骨右下1 尺骨左1、中手骨中破片1、寛骨左腸破片1、大腿骨左上～中1若上ハズレなし 下1、下骨端のみ1若ハズレ、中1、右1若上下ハズレなし解体痕あり、中1 脛骨左中1、右下1、下1若下ハズレなし、中足骨左1、右中1、左右不明中破片1	19
IL	北側トレンチ	上腕骨左中～下1解体痕あり、中手骨右1、上～中1、大腿骨左上1、中1、脛骨右下1解体痕あり	6
BK	南側トレンチ	下顎骨左(×××××)成P2～M3脱落、M12部分病変 軸椎1半欠、橋骨左1、尺骨左1、中足骨左中1	5
C	東側セクション	橋骨右上1	1
G	南側セクション	橋骨左上～中1、脛骨右上～中1、下1	3
A	包含層	上層 脊骨右上～中1若上ハズレなし	1
		中層上部 下頸枝左1	1
		中層中部泥炭層 基節骨1	1
		下層 軸椎1、中手骨右2	3
B	包含層	上層下部 前頭骨一部+角突起左、中手骨下1、寛骨右腸1、大腿骨右上1 中足骨左上1半欠、右下1若下ハズレなし、基節骨1	7
		中層上部 橋骨左下1半欠、脛骨左中～下1	2
		中層中部泥炭層 上頸骨左(P234)、下頸骨左(P4M123)成、右(×P34M1)、軸椎1/3 肩甲骨右1、上腕骨右下1若下一部ハズレなし、橋骨左上～中1 中手骨左上～中1、右1、中手骨中破片1、寛骨左腸+坐1、右腸破片1 大腿骨左上1、右中1、脛骨右中1、中破片1、踵骨右1、中足骨左1 基節骨4、1若上ハズレなし、椎骨1	24
		下層 肩甲骨右破片1、脛骨左下1若下ハズレなし	2
		不明 橋骨右上1、距骨右1、基節骨1	3
		上層 橋骨左下1	1
C	包含層	上層下部 側頭骨一部(下頸関節窩あり)右、中手骨中1、肩甲骨左1 大脛骨右上～中1若上ハズレなし下切断、脛骨右上1若上ハズレあり、中1、踵骨右1、角破片2	9
		中層 中手骨右上～中1	1
		中層上部 脊骨右下1	1
		中層中部泥炭層 下顎骨右(m234M1②)幼M2未出齒槽開く、肩甲骨左1、右1 上腕骨右上～中1、下1解体痕あり、中1、橋骨右1、寛骨右1、脛骨右上1 中足骨右上～中1、中破片1	11
		中層下部 肩甲骨左1、脛骨右下1	2
		下層 肩甲骨右1、上腕骨右下1、脛骨右下1、中足骨右中～下1若下ハズレなし	4
D	包含層	中層 上腕骨右中1、脛骨右中1	2
E	包含層	上層 下顎骨右(P234M123)成M3半欠、肩甲骨左2、脛骨右上1	4
		上層中部 下顎骨左(×P34M123)成、脛骨左下1、中1	3
		上層下部 脊骨左下1、右上1、下1、中足骨左上1、右下1	5
		中層上部下顎骨左(××××P2×)、肩甲骨右破片1 中足骨左中～下1若下ハズレなし、基節骨1若上ハズレなし、中節骨1	5
		中層中部 脊骨左上～中1	1
		中層下部 大腿骨右中1	1
G	包含層	上層下部 下顎骨右(P34M123)成、上腕骨右下1半欠、中手骨下1、踵骨右1、手足根骨1	5
		中層上部泥炭層 下顎骨右(m234M1②)若M2萌出途中、右(P234M123)M3ほぼ萌出完了 橋骨左下1解体痕あり、寛骨右坐1、坐破片1、脛骨左中～下1	8
		中層中部泥炭層 橋骨左1、尺骨右2、中手骨下1、脛骨右下1、小型シカ?距骨右1、小型シカ中足骨右上1	7
		中層下部 上腕骨左中～下1解体痕あり、橋骨左上～中1、中手骨左1 脛骨右1若上ハズレなし、小型シカ?上腕骨左中1	5
		不明 脊骨右中～下1解体痕あり	1
H	包含層	中層上部 中手骨中破片1	1
		不明 中足骨左1若下ハズレなし	1
K	包含層	上層 下顎骨左(××××P234M123)成	1
N	包含層	上層 肩甲骨右1、大腿骨左1、脛骨左中～下1	3
その他		前頭骨一部+角突起右、上顎骨左(P234M12) +切歯骨左 下顎関節突起+筋突起右、環椎1/2、肩甲骨左1、右1 上腕骨左1若上ハズレあり解体痕あり、中～下1解体痕あり 橋骨左上～中1解体痕あり、尺骨左1、右破片1、中手骨左中1、右上～中1 左右不明中1、大腿骨右下1、脛骨左中1 右上～中1、上2若上ハズレなし、下1、距骨左1、中足骨左中1、基節骨1	23
		計	221

註 表3参照。I: 切歯、C:犬歯、P:前臼歯、M:後臼歯、m:乳臼歯、I・P・M・mに伴う数字は歯の順番を示す。

()は頬骨があることを示し、×は歯が脱落していることを示す。○のついた歯は未出または萌出途中であることを示す。

腸:腸骨部分、坐:坐骨部分、恥:恥骨部分。焼:焼けた資料。ハズレなし:成長途中であるため骨端が分離して、かつ残存していないことを示す。

ハズレあり:成長途中であるため骨端が分離しているが、残存していることを示す。幼:幼獣、若:若獣、成:成獣。幼・若のないものは成獣。

表 5 イヌ出土内容

発掘区	遺構・層位		部位・点数	計
BC	溝 1	一括	肋骨片 1、腓骨 1 若	2
		中層中部	椎骨 2 頸骨左 1 + 上頸骨左 (P ②③×××) 若 P234 萌出途中、M2 も萌出途中か 下頸骨右 (◎××P ③××M2 ③) 若 C 萌出途中、P34 途中、M3 未出 上腕骨左 1 若上下ハズレなし、尺骨左 1 若、寛骨左坐 1 ハズレ 大腿骨左 1 若上下ハズレなし、脛骨左 1 若上下ハズレなし 脛骨右 1 若上下ハズレなし、椎骨 2 若、肋骨 20	
BCG	溝 3	一括	頭蓋骨①頭頂～後頭部以外ほぼ完存 上頸骨左 (××××P4M12) + 右 (I123 × P12 × P4M12) 頭蓋骨②吻部と右頸骨弓なし 下頸骨右 (××××m23 ×) 幼すべて乳歯、M1 未出歯槽開く 軸椎 1、橈骨左 1、尺骨右破片 1、寛骨左 1 病変・解体痕あり 大腿骨左 1、左 1 解体痕あり、中～下 1、中 1 椎骨破片 1、肋骨片 5	49
G	井戸 3		下頸骨右 (×××C × P234M12 ×) ⑨、脛骨右 1、四肢骨破片 1	3
	井戸 4		大腿骨左 1	1
C	ピット 2		頭蓋骨⑤左右前頭～頭頂部と右頸骨弓なし 上頸骨左 (I12 × CP1234M12) + 右 (I12 ×× P12 × P4M12)	1
ABG	土層確認 トレンチ		頭蓋骨③吻部と左右頸骨弓なし 下頸骨左 (××××××) 若 P1 ~ M3 部分、P234 は萌出途中 下頸骨右 (××××××P34M1 ××) ⑧ 大腿骨右中 1、脛骨左中 1、右 1 若上ハズレなし、肋骨片 1	7
I	北側トレンチ		頭蓋骨④左右頸骨弓と右側頭部と左右後頭部なし 上頸骨左 (×××C × P23 ××) + 右 (×× I3C ××)	1
BKN	南側トレンチ		頭蓋骨破片 1、上頸骨左 (m23 ×) 幼すべて乳歯 下頸骨左 (×××××××× M12 ×) ⑤、大腿骨左 1、脛骨右中～下 1	5
E	北側セクション		下頸骨左 (×××C × P234M12 ×) ①、椎骨 1	2
G	南側セクション		脛骨右 1	1
A	包含層	中層下部	上腕骨右 1	1
B	包含層	上層下部	上頸骨左 (××××P4) C ~ P3 脱落	1
		中層上部	下頸骨右 (× I2 × C × P234M12 ×) ⑩	1
		中層中部泥炭層	側頭骨頸骨突起右 1、下頸骨左 (×××C ×× P34M123) ③ 肩甲骨右 1、上腕骨左中～下 1、脛骨左 1	5
		中層下部	下頸骨左 (◎×m 2P ③④× M2 ③) 若 C 萌出途中、P34 萌出始め、M3 未出 環椎 1	2
		下層	下頸骨左 (××××P1234M123) ④、肩甲骨右破片 1、上腕骨左中～下 1 右中～下 1 若下ハズレなし、橈骨左中 1、大腿骨左 1、右 1、肋骨片 1	8
		不明	橈骨左 1	1
C	包含層	上層下部	上腕骨右中～下 1 解体痕多い、肋骨片 2	3
		中層中部泥炭層	上腕骨右中～下 1 解体痕あり、橈骨上～中 + 尺骨右 1、中手足骨 1	3
		中層下部	脛骨左 1、椎骨 2、肋骨片 3	6
		下層	肩甲骨右 1、上腕骨左 1	2
E	包含層	上層下部	四肢骨破片 1	1
		中層上部	下頸骨左 (×××CP1 × P34M12 ×) ② 下頸骨右 (×××C ×× P34M12 ×) P4 奇形⑦、脛骨右 1 解体痕あり	3
		下層	脛骨右 1	1
G	包含層	上層下部	大腿骨右 1	1
		中層上部泥炭層	肋骨片 2	2
		中層中部泥炭層	橈骨左 1	1
		中層下部	下頸骨右 (××××× P234M12 ×) ⑥、肩甲骨右 1 上腕骨左中～下 1、大腿骨右中 1、中手足骨 1	5
K	包含層	上層	椎骨 1	
その他			肩甲骨左 1、上腕骨左 1、右 1、尺骨右 2、大腿骨左 1、右 1 脛骨右 1、下 1 解体痕？多い、踵骨右 1、椎骨 1 若、肋骨片 4	16
			計	135

註 表 3・4 参照。同一：同一個体。計測可能な頭蓋骨・下頸骨には No. をつけ、対応する計測値を表 15・16 に示した。

表6 イノシシ類出土内容

発掘区	遺構・層位		部位・点数	計
B	溝1	一括	上腕骨右下1解体痕あり	1
AB	溝2	中層	中手足骨1、2若下ハズレなし	4
		一括	中手足骨1若下ハズレなし	
BCG	溝3	上中層	下顎骨右(M1②)幼M2未出歯槽開く	12
		一括	下顎骨左(©m234M1)幼M2未出歯槽開く、C未出、肩甲骨左1 橈骨右1若下ハズレなし、上～中1、大腿骨左下1切断 脛骨右中～下1、中1、距骨左1、中手足骨1、上1、側指1若下ハズレなし	
G	井戸3		中手足骨下1、中1	2
	井戸	一括	上腕骨左中1	1
AB	土層確認トレンチ		頬骨左1、上顎骨右(CP1234M12)♀若～成、肩甲骨左破片1、右1 橈骨左上1大、尺骨右1若、脛骨右中1、中手足骨上1、下1大、基節骨1	10
IL	北側トレンチ		上腕骨左下1解体痕あり、橈骨左1若下ハズレなし 脛骨右上～中1若上ハズレなし	3
A	包含層	中層上部	中手足骨1	1
B	包含層	上層下部	上腕骨右上1、橈骨右上～中1+尺骨右1、尺骨左破片1、中手足骨1、側指1	5
		中層上部	寛骨左1、踵骨右1若、中手足骨上1	3
		中層中部泥炭層	側頭骨+前頭骨+鼻骨一部右+上顎骨右(P34M123)♀老 下顎骨左(I12×C欠X)+右(I12×X)♀若～成 下顎骨左(Xm4M1②X)♀?若M2萌出途中、M3未出歯槽開く	5
		中層中部白磁溜	下顎骨左中1、中手足骨1若下ハズレなし	
		中層下部	中手足骨(側指)1	1
		下層	中手足骨上1	1
			下顎骨右(P234M12③)♀若M3萌出途中、下I2右1	4
			上腕骨右上1、橈骨左上～中1	
		不明	寛骨左腸破片1	1
C	包含層	上層	末節骨1	1
		上層中部	脛骨右中～下1	1
		上層下部	下顎連合部下面破片1♂若、肩甲骨右破片1、橈骨左1若下ハズレあり 中手足骨1	4
		中層	側頭骨頬骨突起左1	1
		中層中部泥炭層	肩甲骨右破片2、上腕骨右下1解体痕あり、下1、脛骨左中1一部焼、右中1	6
		中層下部	大腿骨右中～下1若下ハズレあり、踵骨左1、中手足骨1	3
		下層	寛骨右1	1
D	包含層	上層上面	踵骨左1	1
E	包含層	上層	尺骨右下1、大腿骨左下1解体痕多	2
		上層下部	下顎C左1雄一部焼	1
		中層上部泥炭層	下顎C右1雄、肩甲骨右1、上腕骨右下1解体痕あり、下1 大腿骨左下1解体痕多、距骨右1半欠、膝蓋骨右1	7
		下層	下顎C右1雄一部焼、上腕骨左下1解体痕多	2
G	包含層	上層中部	側頭骨頬骨突起左1	1
		上層下部	上腕骨右下1若下ハズレなし解体痕あり、中手足骨1若下ハズレあり	2
		中層上部泥炭層	肩甲骨左1、尺骨右下1若、脛骨右上1切断	3
		中層中部泥炭層	前頭骨一部+頭頂骨+後頭骨一部左	1
		中層下部	中手足骨(側指)1	1
H	包含層	中層上部	尺骨右破片1	1
K	包含層	上層	尺骨左下1	1
M	包含層	中層上部	中手足骨(側指)1	1
その他			頭頂骨右破片1、後頭頸右1、頭蓋骨破片2、上I1右1 肩甲骨右破片2、上腕骨右下半欠1一部焼、中1、橈骨右上～中1病変あり 脛骨右中～下2、中1	13
計				108

註 表3・4参照。老：老獣。大：大型の資料。

表 7 ウマ出土内容

発掘区	遺構・層位		部位・点数	計
B	溝 1	一括	中手骨左右不明 1、寛骨左腸+坐 1、大腿骨左 1、右 1 脛骨左 1、右 1、中足骨右? 1 中手骨中 1、中足骨左上~中 1	9
BCG	溝 3	一括	頭蓋骨破片 1、上頸左 I2、右 I1、P3、下頸骨左 (P234M123) ① 上腕骨右中~下 1、右破片 1、大腿骨左中~下 1、中破片 1、末節骨 1	10
G	井戸 2 掘り方		軸椎 1	1
ACG	土層確認トレンチ		環椎 1、肩甲骨左 1、上腕骨右 1 ①、末節骨 1	4
I	北側トレンチ		下頸関節突起左 1、橈骨+尺骨左 1 ①、中手骨左 1 ③ 大腿骨右中 1、中足骨右 1 ②	5
BK	南側トレンチ		下頸骨右破片 1、肩甲骨左 1、上腕骨左中~下 1、寛骨左 1、中足骨左 1 ③	5
E	北側セクション		寛骨左腸破片 1	1
G	南側セクション		脛骨右 1 ③	1
A	包含層	上層	中節骨 1	1
		中層上部	上腕骨右 1 ②、橈骨+尺骨右 1 ③、中手骨右 1 ①、基節骨 1	4
		中層下部泥炭層	橈骨+尺骨左 1 ②	1
		下層	脛骨左 1 ①、右 1 ②、中足骨右 1 ①	3
AD	包含層	上層	上頸左 I3	1
B	包含層	中層下部	上腕骨右中~下 1	1
C	包含層	下層	上頸左 M3、右 M3、下頸骨破片 1、寛骨左 1	4
E	包含層	中層上部泥炭層	上頸左 P3、右 P2、脛骨左 1 若上下ハズレなし、中足骨左上~中 1 若	4
G	包含層	下層	中手骨右 1 ②、寛骨左 1 解体痕あり	2
		中層上部泥炭層	下頸骨破片 1	1
		下層	前頭骨一部+頭頂骨+後頭骨一部左右	1
K	包含層	上層	上頸左 P4、橈骨+尺骨右 1 ④	2
		下層	上腕骨左下外側 1/2	1
L	包含層	上層	下頸骨左 (××P4×) ②、寛骨左坐破片 1	2
M	包含層	上層	上頸骨破片 1、尺骨右 1	2
N	包含層	上層	踵骨右内 1/2 のみ	1
その他			上頸左 M1、中手骨右 1、踵骨左 1	3
			計	72

註 表 3・4 参照。下頸骨と完存の四肢骨には No. をつけ、対応する計測値を表 17・18 に示した。

表 8 ウシ出土内容

発掘区	遺構・層位		部位・点数	計
G	溝 3	一括	下頸骨右 (P234M12)、下頸骨破片 1、寛骨右腸+恥 1 切断痕あり	3
		井戸 2 掘り方	下頸関節突起右 1	1
		井戸 3	側頭骨関節突起右 1	1
ABD	土層確認トレンチ		角芯右 1 切断痕あり、下頸歯破片 1、軸椎 1 若、橈骨右上 1 尺骨左 1、脛骨左上破片 2、中破片 1	8
I	北側トレンチ		下頸骨左 (P234M123)、橈骨左 1 若下ハズレなし	2
BK	南側トレンチ		前頭骨一部+角突起+頭頂骨一部右、肩甲骨右破片 1、中足骨右 1 距骨右 1 半欠、踵骨右 1 部焼解体痕あり、手足根骨 3	8
E	北側セクション		中手骨左内側 1/2 若下ハズレなし	1
A	包含層	中層上部泥炭層	橈骨左中 1	1
		中層中部泥炭層	基節骨 1	1
B	包含層	上層	上頸右 M3	1
		上層下部	軸椎破片 1、基節骨 1	2
		中層上部	踵骨左 1、角芯左 1 切断痕あり	2
		中層中部泥炭層	上頸骨右 (M3)、中足骨右 1、距骨右 1、手足根骨 1	4
		下層	中手骨左 1	1
C	包含層	上層	下頸関節突起右 1、中手骨左 1	2
		中層中部泥炭層	下頸骨左 (P4M123)、下頸骨破片 1 大腿骨右下 1 切断・解体痕あり、脛骨右上~中 1	4
		下層	中手骨左上外側 1/2、中足骨中破片 1	2
E	包含層	中層上部泥炭層	上腕骨右上破片 1	1
		中層下部	中手骨右 1、寛骨左腸破片 1	2
G	包含層	上層下部	上腕骨右中 1	1
		中層中部泥炭層	大腿骨右上 1 一部焼	1
N	包含層	上層	頭蓋骨破片 1	1
その他			角芯右 1 切断痕あり、上頸右 M2、M3、下頸骨右 (M3) 下頸左 I2or3、肩甲骨左破片 1、橈骨左中 1 若、中手骨右 1 脛骨右下 1、中足骨左 1、踵骨左 1 若前端部分切断	11
			計	61

註 表 3・4 参照。

表9 ヒト出土内容

発掘区	遺構・層位		部位・点数	計
A	溝2	中層	橈骨左中1	1
C	溝3	一括	大腿骨右中1	1
ABC	土層確認トレンチ		上腕骨左中2、大腿骨左中1、脛骨左中1	4
I	北側トレンチ		上腕骨左中1	1
B	包含層	中層下部	後頭骨+右側頭骨、頭蓋骨破片1	2
C	包含層	上層	寛骨左腸破片1、脛骨左中1	2
		上層下部	橈骨左中1	1
		中層下部	頭蓋骨破片2	2
E	包含層	上層黄緑砂層	四肢骨破片1	1
		上層中部	頭蓋骨破片1	1
		中層上部	橈骨左中1	1
		中層中部	四肢骨破片1	1
G	包含層	中層上部泥炭層	尺骨左破片1	1
H	包含層	中層上部	四肢骨破片1	1
その他			頭蓋骨破片1、脛骨右中1、腓骨右中1	3
計				23

註 表3・4参照。

表10 ウマ or ウシ出土内容

発掘区	遺構・層位		部位・点数	計
A	溝2	中層	椎骨1若、四肢骨破片1	2
CG	溝3	一括	椎骨破片1、肋骨片4、破片2	7
D	土坑2		四肢骨破片1	1
ABG	土層確認トレンチ		四肢骨破片3、肋骨片3、破片2	8
L	北側トレンチ		肋骨片2	2
B	南側トレンチ		破片1	1
K	西側トレンチ		破片1	1
E	北側セクション		肋骨片2	2
A	包含層	下層	肋骨片1	1
B	包含層	上層上部	肋骨片1	1
		上層中部	肋骨片1	1
		上層下部	四肢骨破片1、肋骨片1	2
		中層上部	椎骨破片1	1
		中層中部泥炭層	上腕骨上破片1、肋骨片1	2
		中層下部	四肢骨破片2、破片1	3
		下層	四肢骨破片2、肋骨片3	5
C	包含層	上層	四肢骨破片1	1
		上層下部	肋骨片2	2
		中層中部泥炭層	四肢骨破片1	1
		中層下部	手足根骨破片1、肋骨片1	2
		下層	肋骨片2	2
E	包含層	上層	椎骨1若	1
		上層中部	四肢骨破片1、肋骨片1	2
		中層上部泥炭層	四肢骨破片1、破片1	2
		中層中部	肋骨片1	1
		下層	肋骨片1	1
G	包含層	中層上部	四肢骨破片1	1
		中層中部泥炭層	四肢骨破片1、破片2	3
M	包含層	上層	肋骨片2	2
その他			四肢骨破片2、肋骨片3、破片1	6
計				67

註 表3・4参照。

表 11 シカ類 or イノシシ類出土内容

発掘区	遺構・層位		部位・点数	計
BC	溝 1	一括	四肢骨破片 9	9
BCEG	溝 3	一括	四肢骨破片 12、椎骨 1 若、肋骨片 5、破片 1	19
G	井戸 4 掘り方		四肢骨破片 1	1
ABC	土層確認トレンチ		四肢骨破片 6、椎骨破片 1、肋骨片 1	8
IL	北側トレンチ		四肢骨破片 1、肋骨片 2	3
G	南側セクション		四肢骨破片 1	1
A	包含層	中層下部泥炭層	四肢骨破片 1	1
B	包含層	上層	肋骨片 1	1
		上層下部	四肢骨破片 5	5
		中層上部	四肢骨破片 3、1一部焼、肋骨片 2	6
		中層中部泥炭層	四肢骨破片 3、1 焼、肋骨片 2	6
		中層中部白磁溜	四肢骨破片 1	1
		中層下部	四肢骨破片 1	1
		下層	四肢骨破片 2、肋骨片 3、破片 1	6
		不明	四肢骨破片 1 一部焼	1
C	包含層	上層	四肢骨破片 1	1
		上層下面	四肢骨破片 8、椎骨破片 2、肋骨片 3	13
		中層	椎骨 1	1
		中層中部泥炭層	四肢骨破片 2	2
		下層	肋骨片 1	1
D	包含層	中層	四肢骨破片 1	1
E	包含層	上層	四肢骨破片 2	2
		上層上部	肋骨片 1	1
		上層下部	四肢骨破片 3	3
		中層上部泥炭層	四肢骨破片 3、肋骨片 2	5
G	包含層	上層	四肢骨破片 1	1
		中層上部泥炭層	四肢骨破片 3、椎骨 1 若	4
		中層中部泥炭層	四肢骨破片 1	1
		中層下部	四肢骨破片 2	2
H	包含層	中層上部	四肢骨破片 1	1
K	包含層	中層上部	椎骨 1 若	1
N	包含層	上層	四肢骨破片 1、椎骨破片 1	2
その他			四肢骨破片 7、椎骨破片 1、肋骨片 11	19
計				130

註 表 4 参照。

表 12 陸獣出土内容

発掘区	遺構・層位		部位・点数	計	
BG	溝 3	一括	破片 3	3	
ABCG	土層確認トレンチ		破片 8	8	
B	南側トレンチ		破片 1	1	
B	包含層	上層下部	破片 3	3	
		中層上部	破片 2	2	
		中層中部泥炭層	破片 3、1 烧	4	
C	包含層	上層	破片 3	3	
		上層下部	破片 1	1	
		中層下部	破片 1	1	
D	包含層	中層	破片 5	5	
E	包含層	上層黄緑砂層	破片 1	1	
G	包含層	上層下部	破片 2	2	
		中層中部泥炭層	破片 4	4	
その他			破片 5	5	
計				43	

註 表 4 参照。

VII章

表 13 その他の哺乳類

発掘区	遺構・層位		種	部位・点数	計
C	包含層	中層	種不明陸獣	下顎左第3後臼歯1	4
		下層	クマ	上腕骨左中1	
E	包含層	不明	ウサギ	上腕骨左1	
その他		中小陸獣	椎骨1		
C	土層確認トレンチ	クジラ類?	破片1		5
B	包含層	中層上部	クジラ類?	破片1	
C	包含層	上層下面	海獣	破片1	
E	包含層	上層	イルカ類	後頭骨破片1	
G	包含層	上層上部	クジラ類	破片1	
C	包含層	上層	陸獣 or 海獣	破片2	3
G	包含層	上層下部	陸獣 or 海獣	破片1	

註 表3参照。

表 14 ニワトリ各部位の長さ

部位	長さ
上腕骨①	64.4
尺骨①	72.0
脛骨①	108.6 ±
脛骨②	122.0 ±
脛骨③	129.0 ±
中足骨①	81.6
中足骨②	82.5
中足骨③	84.1

註 表3参照。計測値の単位はmmで、±付きの数値は近似値を示す。

表 15 イヌ頭蓋骨計測値

頭蓋骨 No.	最大頭蓋長 I ~ P	基底頭蓋長 B ~ P	顔長 P ~ N	吻幅 7 ~ 7	前頭幅 Ect ~ Ect	最小眼窓幅 Ent ~ Ent	最小前頭幅 fs ~ fs	頬骨弓幅 Zy ~ Zy	頭蓋幅		後頭部長 I ~ Br	後頭部高 B ~ Br	脳頭蓋長 I ~ N	前頭部長 Br ~ P	P4長さ
									au ~ au	eu ~ eu					
①	—	141.4	81.1	30.7	37.4	27.5	27.8	90.1	56.5	54.8	—	—	—	—	16.5
②	—	—	—	—	43.3 ±	31.0 ±	32.0 ±	—	62.1	57.1	50.6	65.2	94.5	—	—
③	—	—	—	—	39.2	—	30.5	—	54.4	51.1	44.3	59.3	80.8	—	—
④	—	—	80.8	32.3 ±	—	—	—	—	—	—	—	—	—	125.4 ±	—
⑤	—	—	—	37.9	—	—	—	—	60.5	—	—	—	—	—	18.7

註 表5参照。計測点は斎藤(1963)に従った。計測値の単位はmmで、±付きの数値は近似値を示す。—: 欠損のため計測不可。

5個体とも最大頭蓋長は計測不可能だったため、推定体高は算出していない。

表 16 イヌ下顎骨計測値

下顎骨 No.	歯式	P2P3 間の高さ	P3 中央部での高さ	M1 中央部での高さ	M1M2 間での高さ	P3 中央部での厚さ	M1 中央部での厚さ	M2 中央部での厚さ	M1 長さ	下顎骨全長 1	下顎骨全長 2	推定体高 (cm)
①	L (× × × C × P234M12 ×)	20.5	22.4	25.4	24.8	12.5	13.3	13.9	20.0	135.7	135.5	47.7
②	L (× × × CP1 × P34M12 ×)	19.4	21.6	24.4	22.9	10.0	11.6	11.4	19.1	128.0	127.5	45.5
③	L (× × × C × P34M123)	17.0	18.0	20.5	19.6	9.0	10.9	10.0	19.2	114.6	112.2	40.4
④	L (× × × × P1234M123)	18.5	20.6	24.3	24.7	9.6	11.4	11.8	20.2	—	—	—
⑤	L (× × × × × × M12 ×)	15.8	17.2	18.9	17.9	8.6	9.9	9.7	17.4	—	103.6 ±	37.0 ±
⑥	R (× × × × P234M12 ×)	19.2	21.3	24.5	23.4	10.8	11.4	12.8	18.6	—	138.1	48.3
⑦	R (× × × C × P34M12 ×)	18.6	20.9	23.9	24.0	10.2	12.4	13.2	20.1	134.4	134.4	47.4
⑧	R (× × × × × P34M1 × ×)	19.5	21.6	25.4	24.8	10.9	12.6	12.3	19.7	132.9	132.8	47.0
⑨	R (× × × C × P234M12 ×)	16.7	18.4	20.8	20.0	8.9	9.8	10.3	18.1	—	118.2	42.6
⑩	R (× I2 × C × P234M12 ×)	16.8	17.8	17.8	18.9	8.6	11.1	9.8	19.1	115.6	113.2	40.8

註 表 5・15 参照。計測値の単位はmm、推定体高の単位はcmで、±付きの数値は近似値を示す。—：欠損のため計測不可。推定体高は下顎骨全長 2 の計測値から山内（1958）により算出した。

表 17 ウマ前臼歯・後臼歯の長さ・幅

	下顎骨①		下顎骨②	
	長さ	幅	長さ	幅
第 2 前臼歯	28.2	12.8	—	—
第 3 前臼歯	26.4	14.6	—	—
第 4 前臼歯	25.6	14.3	26.8	15.3
第 1 後臼歯	23.5	13.4	—	—
第 2 後臼歯	22.9	12.1 ±	—	—
第 3 後臼歯	27.8	11.8	—	—

註 表 7 参照。計測値の単位はmmで、±付きの数値は近似値を示す。

表 18 ウマ四肢骨の長さと復元体高

	上腕骨	上腕骨から復元した体高	橈骨	橈骨から復元した体高	中手骨	中手骨から復元した体高
	脛骨	脛骨から復元した体高	中足骨	中足骨から復元した体高		
①	26.1	130.3	29.4	116.9	21.4	130.9
②	28.3	142.2	29.2	115.8	20.4	124.2
③	—	—	31.7	128.8	20.6	125.6

	脛骨	脛骨から復元した体高	中足骨	中足骨から復元した体高
①	31.7	122.5	23.6	117.5
②	31.7	122.5	27.1	134.4
③	30.9	118.1	23.7	118.0

註 表 7 参照。計測値と体高の単位はcm。体高復元は林田他（1957）による。

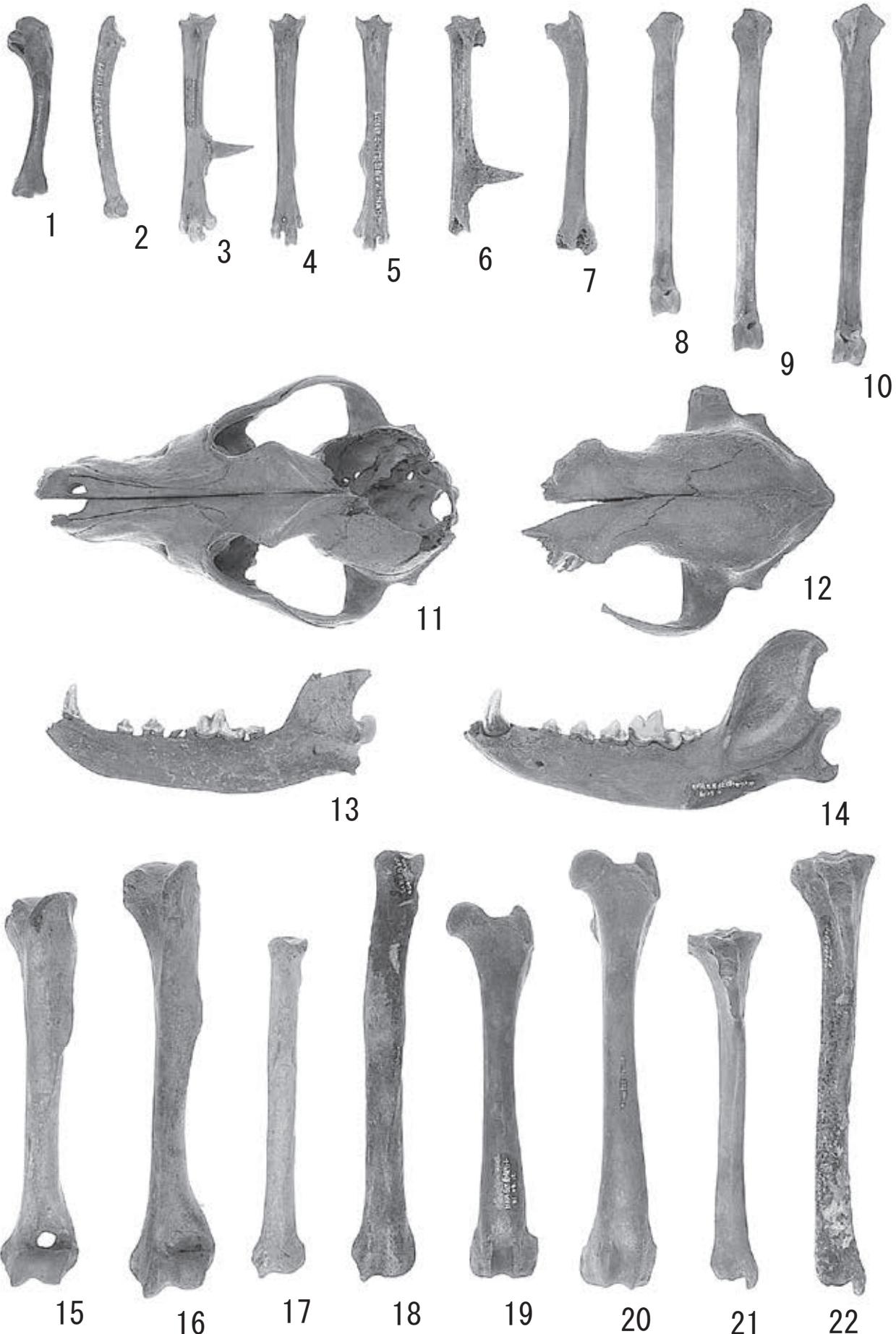


写真1 ニワトリ・イヌ（約1/2）

1～10. ニワトリ（1. 上腕骨①、2. 尺骨、3. 中足骨①、4. 中足骨②、5. 中足骨③、6. 中足骨、7. 大腿骨、8. 胫骨①、9. 胫骨②、10. 胫骨③） 11～22. イヌ（11. 頭蓋骨①、12. 頭蓋骨②、13. 下顎骨⑨、14. 下顎骨①、15・16. 上腕骨、17・18. 橫骨、19・20. 大腿骨、21・22. 胫骨） 2・5・7・10・14～20は左側、1・3・4・6・8・9・13・21・22は右側 ①～⑨の数字は出土内容表を参照



写真2 イノシシ類・シカ類（約1/2）

1～7. イノシシ類（1. 上顎骨、2. 下顎骨、3・4. 上腕骨、5・6. 橫骨、7. 脛骨）8～17. シカ類（8・9. 橫骨、10・11. 中手骨、12・13. 脂骨、14・17. 中足骨、15・16. 距骨、12・14は小型シカ、15は小型シカ？、8～11・13・16・17はニホンジカ）8～13・16・17は左側、1・3～7・14・15は右側



写真3 ウシ・ウマ（約1/2）

1～3. ウマ（1. 下顎骨①左、2. 上腕骨②右、3. 中足骨②右）4・5. ウシ（4. 中足骨右、5. 脛骨右）
①～③の数字は出土内容表を参照